

# 農業技術情報

2023年6月2日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128  
JA幕別町 0155-54-4118  
JAさつない 56-2131  
JA帯広大正 64-4591  
日甜幕別原料事務所 54-2756  
幕別町農林課 54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町6月1日）

（）内は平年値（※春小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早2	草丈 64.4(63.1)cm 茎数 828(901)本/m <sup>2</sup> 上位茎数 631本/m <sup>2</sup>	止葉期 5/23 (5/25) 出穂始 5/30 (6/2) 出穂期 6/ 2 (6/4)
春まき小麦	遅2	草丈 33.5(※42.7)cm 葉数 6.1(※6.3)枚 茎数 620(※1,066)本/m <sup>2</sup>	幼穂形成期 5/23 (※5/21) 止葉期 6/ (※6/ 7)
馬鈴しょ	早1	茎長 5.6(4.5)cm 茎数 3.6(3.0)本/株	萌芽期 5/24 (5/25)
大豆	早3	は種期 5/15(5/17) は種終 5/23(5/21)	出芽始 5/24 (5/27) 出芽期 5/26 (5/29)
小豆	早1	は種始 5/15(5/16) は種期 5/21(5/22) は種終 5/25(5/26)	出芽始 5/31 (6/1) 出芽期 6/ 2 (6/3)
菜豆	—	は種始 5/24(5/25) は種期 5/30 (5/31)	
てん菜(移植)	±0	草丈 11.6(15.2)cm 葉数 11.2(11.2)枚	
てん菜(直播)	±0	草丈 5.5(6.1)cm 葉数 4.0(3.9)枚	
牧草	早3	草丈 73.9(67.9)cm	
飼料用とうもろこし	早1	草丈 16.1(15.7)cm 出葉数 4.1(3.9)枚 は種期 5/9(5/12) は種終 5/19 (5/21)	出芽期 5/21(5/22)
ながいも(マルチ)	—	植付始 5/10(5/13) 植付期 5/15(5/19) 植付終 5/27 (5/28)	
たまねぎ	早2	草丈 15.7(19.5)cm 生葉数 3.7(3.3)枚 葉鞘径 5.8(5.6)mm	

## 畑作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

### <麦類>

「きたほなみ」は平年と比べ2日早く出穂期を迎えています。出穂以降の最も重要な管理は赤かび病防除です。防除適期を逃さないよう、ほ場観察に努め計画的防除を行ってください。

#### 1 秋まき小麦の出穂期以降の窒素追肥

「きたほなみ」の出穂期以降に葉面散布で窒素追肥を行う場合は以下に注意して行いましょう。高タンパクにならないよう注意します。

- (1) 尿素を使用する場合は1.0～1.5%液を計3回散布します。
- (2) 過去に高タンパクだったほ場は葉面散布を控えてください。

(3) 高温時の散布は葉やけの原因になるので避け、原則夕方の散布とします。また、尿素濃度を 1.0%程度まで下げるなどしましょう。

## 2 赤かび病の防除

赤かび病は開花時期に最も感染しやすく、多湿条件で多発します。1回目の適期は開花始期(図1参照)ですが、開花始に雨天の恐れがある場合は、出穂揃から防除します。出穂にばらつきが目立つ場合は、ほ場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除(開花始)を実施し、2回目以降の薬剤散布でほぼ全ての穂が薬液で保護されるように計画的な防除を実施してください。また薬剤の使用回数には十分注意してください。

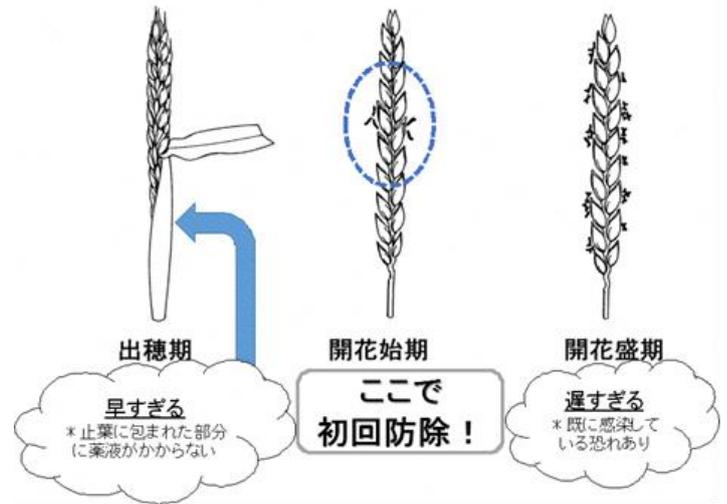


図1 赤かび病の1回目防除時期

今年は特に生育の不揃いが多いの

で、場合によっては臨機で4回目の防除が必要になることが予想されます。

表1 小麦赤かび病防除体系例

防除時期	農薬名	RACコード※2	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
1回目(開花始)	プロラインフロアブル	3	2,000	収穫21日前まで	2回
2回目(1回目の7日後)	ミラビスフロアブル	7	1,500	収穫7日前まで	2回
3回目(2回目の7~10日後)	バラライカ水和剤※1	M4・3	500	収穫14日前まで	2回
臨機	ベフトップジンフロアブル	M7・1	800~1,000	収穫14日前まで	3回

※1バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム (物理性の問題のため)

※2農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。

「RACコード」が同じであれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

## 3 アブラムシ類の防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【アブラムシ要防除水準】出穂10日後頃に半分以上の穂でアブラムシが観察される。

表2 アブラムシ類防除例

害虫名	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
アブラムシ類	ゲットアウトWDG	3A	4,000	収穫21日前	3回
	スミチオン乳剤	1B	1,000	収穫7日前	1回

※スミチオン乳剤はアワヨトウ・ムギキモグリバエに登録有り。

#### 4 春まき小麦の追肥

現在の生育は平年よりやや遅れています。止葉期以降の追肥可否は品種によります。

「春よ恋」: 止葉期以降の追肥は遅れ穂の発生につながりやすいので注意が必要

「はるきらり」: タンパク向上のため、地力に応じ次表の追肥対応を参考とする。(中地力以上ほ場では、基本的に葉面散布のみ行い、止葉期までの生育が不足している場合のみ補助的に止葉期追肥も行う)

表3 「はるきらり」の追肥体系例

窒素肥沃度 区分	熱水抽出性窒素 (mg/100g)	窒素施肥量(kgN/10a)			
		基肥	止葉期	開花期以降 葉面散布	合計
低地力	0~5	12	4	3	19
中地力	5~10	12	0	4	16
高地力	10以上	8	0	4	12

#### 5 春まき小麦の倒伏対策

過繁茂等で倒伏の恐れがある場合は、茎稈伸長抑制剤を散布しましょう(薬剤例は5/17号参照)。薬害を助長する場合がありますので、他剤との混用は避けてください。

#### 6 春まき小麦赤さび病、うどんこ病の防除対策

「春よ恋」は赤さび病、うどんこ病に対する抵抗性がそれぞれ「やや強」・「強」、「はるきらり」は同じく「強」・「中」であり、臨機防除で対応します。現時点で下葉に病徴が見られるような場合は、その後の進展に注意し、止葉期に上位2葉に病斑が認められる場合は防除を実施しましょう。

表4 春まき小麦赤さび病、うどんこ病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
アミスター20フロアブル	11	2,000~3,000	収穫7日前	3回

### <てん菜>

#### 1 中耕

- (1) 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、生育促進を図りましょう。
- (2) 中耕の深さは根の広がりを見極め、次第に狭く深くなるようにして、畦間が茎葉で覆われる時期まで数回実施しましょう。
- (3) 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

#### 2 除草剤散布

- (1) 除草剤散布のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、生育と雑草の発生に応じ、遅れないように注意してください。
- (2) 直播栽培は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

- (3) 直播栽培の初回散布時期は雑草発生始～発生揃(てん菜本葉2葉期)で、は種後 30 日前後が目安になりますが、てん菜の葉齢が進んでいない幼小個体では生育が抑制される場合があるため、注意が必要です。
- (4) 直播栽培の風害対策でえん麦を混植した場合は、えん麦の4葉期までに遅れないようにイネ科除草剤(ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤)による処理を行ってください。

### 3 アブラムシの防除

移植栽培におけるかん注処理の持続効果は40～45日間程度です。薬剤の持続期間を考慮し、間隔を空けすぎないように防除を実施しましょう。

表5 アブラムシの防除例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
コルト顆粒水和剤	9B	6,000	収穫7日前	3回

### 4 根腐病防除の実施

根腐病は6月中旬頃頃から発生します。特に連作、短期輪作、排水不良など多発が予想される場合は、6月上中旬と7月中旬の2回防除を実施しましょう。その際、耐性菌を発生させないため同じ薬剤の連用は避けてください。直播栽培では特にモンセレン顆粒水和剤のかん注処理を行っていないので根腐病防除を行いましょう。

表6 根腐病の防除薬剤例(200L/10a 株元散布)

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
ミリオネアフロアブル	7	4,000	収穫7日前	4回
アミスター20フロアブル	11	1,500	収穫14日前	3回

## <ばれいしょ>

### 1 中耕・培土

「カルチ」・「畦間サブソイラ」等により土壌の膨軟化と地温の上昇を図り、通気性や透水性の向上に努めましょう。

#### 《慣行培土の注意点》

- ・晴天の午前中に行うと効果的ですが、土壌水分が低いと培土が崩れやすく、緑化の原因になる場合があるので、適度に水分がある時期に実施しましょう。
- ・土壌が過湿状態の時にすると、土を締め過ぎるので注意しましょう。
- ・培土作業が遅れるとストロンを損傷し、塊茎数の減少や肥大の妨げとなるため、着蕾期(平年6/12)までに最終培土を終えましょう。

### 2 除草剤

土壌散布は萌芽前までです。一年生イネ科雑草の茎葉散布については次表を参照に適切に散布してください。

表7 ばれいしょ除草剤(対象:一年生イネ科)の使用基準(例)

除草剤名	使用時期	10a当薬量	回数(以内)	注意事項
ポルトフロアブル	イネ科雑草3～8葉期(収穫前日まで)	200～300ml	1回	イネ科雑草が完全に枯死するには5～10日を要する。

ナブ乳剤	イネ科雑草3～5葉期 イネ科雑草6～8葉期 (収穫前日まで)	150～200ml 200ml	2回	効果の発現には2週間程度要する。
ワンサイドP乳剤	イネ科雑草3～8葉期 (収穫前日まで)	75～100ml	1回	イネ科雑草が完全に枯死するまで2週間程度を要する。

※上記3剤はいずれもスズメノカタビラに効果が劣る。

### 3 病害虫防除

#### (1) 疫病

平均気温 15℃以上(最適気温 18～20℃)、多湿条件で多発します。次号より掲載する疫病発生予察情報を参考に防除してください。

#### (2) ナストビハムシ・アブラムシの防除

林地や防風林の近くで多発しやすいので注意しましょう。ナストビハムシは成虫による葉の食害だけでなく、幼虫によるイモの表面や内部に至る糸状食入痕の被害により、食用・加工用では商品化率が低下します。成虫や葉の食痕を確認したら防除を行いましょう。成虫防除は幼虫密度を低下させます。

表8 ナストビハムシを中心とした防除例

害虫名	薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期	回数 (以内)
ナストビハムシ アブラムシ類	ゲットアウトWDG	3A	2,000～3,000	収穫7日前	4回
	モスピランSL液剤	4A	4,000	収穫7日前	3回
	アクタラ顆粒水溶剤	4A	ナストビハムシ:2,000 アブラムシ:3,000	収穫14日前	3回

※ナストビハムシ成虫の発生盛期(6月上旬)に7～10日間隔で2回実施する。

## <豆類>

### 1 除草剤の散布

例年、散布適期を逸したり、除草剤散布後の降雨などの影響で、薬害による生育遅延が散見されます。豆類の生育や雑草の発生状況を確認し効果的な散布に心がけましょう。「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤や他の除草剤との10日以内の近接散布は薬害の恐れがあるので避けましょう。\* 薬剤使用例は5/17号参照

### 2 中耕

除草剤の残効を考慮し、地温の上昇と除草のため中耕を実施しましょう。除草のための中耕は、日中の暖かい日が効果的です。

### 3 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

山間部やほ場周辺に牧草地がある場合は、被害の拡大が懸念されます。クルーザーを使用していない場合は、出芽揃から初生葉展開期に1回目の防除が必要です。その後2回目の防除を1回目の7日後頃に行いましょう。また、クルーザーを使用している場合についても、は種後1か月を目処に防除を行いましょう。\* 薬剤例は5/17号参照

### 4 金時のかさ枯病

低温・多湿条件や機械管理作業で蔓延します。予防防除としては、子葉展開期から10～

15 日間隔で銅剤を2回処理します。発病株は速やかに抜き取るとともに、治療効果もある「カスミンボルドー(銅剤水和剤)」による防除を実施してください。

表9 かさ枯病防除例

病害名	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
かさ枯病	ドイツボルドーDF	M1	500	—	—
	コサイド 3000	M1	1,000		
	カスミンボルドー(銅剤水和剤)	24・M1	1,000	収穫 30 日前	3回

※ 「粉衣用ペアーカスミンD」と「カスミンボルドー(銅剤水和剤)」は合計の使用回数を3回以内とする。

# 野菜

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

## < キャベツ、はくさい >

コナガにジアミド系薬剤(RACコード:28)を1世代2回以上使用した場合、薬剤感受性が低下する恐れがあります(令和4年度指導参考)。

使用する場合は、表1の日数を目安に間隔をあけてください。

表1 コナガの世代が切り替わるまでの日数(道東)

5月	6月	7月	8月	9月
45日	30日	25日	35日	45日

### (1)害虫防除

コナガ・モンシロチョウともに発生が多い傾向にあります。

#### ①育苗期後半の防除

・初期発生の抑制のため、ジュリボフロアブルやスタークル顆粒水和剤等のかん注処理を徹底してください。

#### ②定植後の防除

・コナガは薬剤抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避けてください。

表2 コナガ・モンシロチョウの防除薬剤例(定植後)

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数
ハクサップ水和剤	3A	1,000~2,000倍	収穫前日	5回以内
	1B			
ディアナSC	5	2,500~5,000倍	収穫前日	2回以内
グレーシア乳剤	30	2,000~3,000倍	収穫7日前	2回以内
エスマルクDF(BT剤)	11A	1,000~2,000倍	収穫前日(発生初期)	—

### (2)べと病・菌核病の防除

べと病は15℃程度の多湿条件、菌核病は15~20℃程度の多湿条件で発生が助長されます。

表3 キャベツ病害の防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数	べと病	菌核病
ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000~3,000倍	収穫3日前	3回以内		○
ランマンフロアブル	21	2,000倍	収穫3日前	4回以内	○	
レーバフロアブル	40	2,000倍	収穫7日前	3回以内	○	

表4 はくさい病害の防除薬剤例

薬剤名	RACコード*	使用濃度	使用時期	使用回数	べと病	菌核病
アミスター20フロアブル	11	2,000倍	収穫7日前	4回以内	○	
ランマンフロアブル	21	2,000倍	収穫3日前	4回以内	○	
レーバフロアブル	40	2,000倍	収穫7日前	3回以内	○	
パレード20フロアブル	7	2,000~4,000倍	収穫前日	3回以内		○

### (3)軟腐病の予防防除開始

はくさい:6月中~下旬頃から予防防除開始時期です。結球前から防除を開始してください。

キャベツ:結球期に発生が多くなります。結球初期から防除を開始してください。

害虫の食痕等の傷口が侵入経路となるため、同時に害虫防除も注意が必要です。

表5 キャベツ・はくさいの軟腐病防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
スターナ水和剤	31	1,000倍	収穫7日前	3回以内
バリダシン液剤5	U18	800倍(キャベツ)	収穫7日前	5回以内
		500倍(白菜)	収穫3日前	3回以内
Zボルドー	M1	500倍	—	—

## < レタス >

### (1) 各種病害の防除

菌核病と灰色かび病は、15～20℃の多湿条件、すそ枯病とべと病は15℃程度の多湿条件で発生が多くなります。灰色かび病は特に結球期に発生しやすくなります。

表6 レタスの病害防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数	菌核病	灰色かび病	すそ枯病	べと病
パレード20フロアブル	7	2,000～4,000倍	収穫前日	3回以内	○	○	○	
アミスター20フロアブル	11	2,000倍	収穫7日前	4回以内	○	○	○	○
ダコニール1000	M5	1,000倍	収穫14日前	3回以内			○	○

また、腐敗病は20～25℃の多湿条件で発生が助長されます。

表7 レタス腐敗病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
カセット水和剤	31	1,000倍	収穫7日前	2回以内
	24			
バリダシン液剤5	U18	800倍	収穫前日	3回以内

### (2) ナモグリバエの防除

葉に白い点状の産卵痕が見られた場合は防除を実施してください。

表8 ナモグリバエの防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
ダントツ水溶剤	4A	2,000倍	収穫前日	2回以内
アフーム乳剤	6	1,000～2,000倍	収穫3日前	3回以内
コテツフロアブル	13	2,000倍	収穫前日	2回以内

## < だいこん >

### (1) 亀裂褐変症と軟腐病の予防防除

多湿条件で気温が高くなると亀裂褐変症や軟腐病の発生が助長されます。

表9 だいこんの病害防除例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数	注意事項
は種後20日目	亀裂褐変症	バシタック水和剤75	7	1,000～1,500倍	収穫21日前	3回以内	
は種後25日目	軟腐病	Zボルドー	M1	500倍	—	—	クレフノン200倍を加用

### (2) キスジノミハムシとコナガの防除

・は種時にフォース粒剤を使用したほ場では、は種後20日頃から茎葉散布を行ってください。

表10 だいこんの害虫防除薬剤例

防除時期	病害名	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
は種後20日目	キスジノミハムシ	エルサン乳剤	1B	1,000～2,000倍	収穫30日前	2回以内
は種後25日目	コナガ	アグロスリン水和剤	3A	1,000～2,000倍	収穫7日前	5回以内

## < たまねぎ >

### (1) 白斑葉枯病・べと病の発生初期の防除

- ・白斑葉枯病は2日以上連続した降雨、または10mm以上のまとまった降雨の後7日間は発生の可能性が高く、特に平均気温18℃以上の温暖な日に初発の可能性が高くなります。
  - ・べと病は気温が20℃以下で、高湿度条件が続くと発生しやすくなります。
- 蔓延が早いため、発生しやすい条件下では特に予防防除を徹底してください。

表 11 たまねぎ白斑葉枯病・べと病の防除体系例

防除時期	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
6/上中	グリーンダイセンM水和剤	M3	400～600倍	収穫3日前	5回以内
6/中	フロンサイドSC	29	1,000～2,000倍	収穫3日前	5回以内

### (2) ネギアザミウマ、ハエ類の防除

- ・ほ場でネギアザミウマの成虫を確認したら、速やかに防除を開始してください。
- ・ネギハモグリバエの幼虫がりん茎に侵入すると、品質が著しく低下し、被害が進むと防除効果が得にくくなります。
- ・ハエ類の産卵はほ場が湿潤の場合、多くなります。

表 12 たまねぎネギアザミウマの防除体系例

防除時期	薬剤名	RACコード	使用濃度	使用時期	使用回数
6/上中	トクチオン乳剤	1B	1,000倍	収穫7日前	4回以内
6/中	ファインセーブフロブル	34	1,000～2,000倍	収穫3日前	3回以内

表 13 たまねぎハエ類の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	害虫名	使用濃度	使用時期	使用回数
ダイアジノン乳剤 40	1B	ネギハモグリバエ	1,000～2,000倍	収穫21日前	2回以内
		タマネギバエ	700倍		
ベネビア OD	28	ハモグリバエ類	2,000倍	収穫14日前	3回以内

### (3) 除草剤

保護葉(オニ皮)になる葉身が伸張する時期以降の除草剤使用は、皮が薄くなり皮むけの原因となります(早生品種で出葉数6葉、中晩生品種で出葉数7～8葉の時期)。

除草剤の処理は6月中旬までに終えましょう。

表 14 移植たまねぎ除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法及び使用時期	使用回数	10a当薬量	注意事項
ボクサー	雑草茎葉散布又は全面土壌散布 定植後又は中耕後(雑草発生前) 但し、収穫45日前まで	2回以内	400～500ml	液肥との混用は、たまねぎの葉に薬害(癒着)を助長する場合がありますので避ける。
グラメックス水和剤	全面土壌散布 定植活着後(雑草発生前) 但し、収穫30日前まで	1回以内	30～50g	<b>キク科雑草に効果が高い反面、薬害リスクも高い。</b> 薬害を回避するため薬量を30～50g/10aとし、涼しい時間帯に使用し、砂質土壌での使用は控える。
アクチノールB乳剤	雑草茎葉散布 生育期但し収穫30日前まで (雑草生育初期)	2回以内	30～50ml	発生後の広葉雑草に効果があるが、薬害の危険性が高い。 薬量を30～50ml程度とし、6月中旬までの涼しい時間帯の使用が望ましい。
セレクト乳剤	雑草茎葉散布又は全面散布 雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期) 収穫21日前まで	3回以内	50～75ml	スズメノカタビラにも優れた効果を示す。 効果の発現までに時間を要する。

### (4) 分肥

移植たまねぎの分肥は、移植6週目以降は効果が落ちるとされています。計画的な分肥を終えていない場合は早急に硝酸カルシウム等の窒素肥料を施用してください。

## < ながいも >

### (1) マルチ栽培での芽やけ対策(スリットからの芽出し)

生育の早いほ場では萌芽が始まっています。ほ場の見回りをこまめに行い、マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ(高温障害)を防ぎましょう。

## < ごぼう >

### (1) 除草剤処理

- ・ごぼうは初期生育が緩慢で、雑草害が生じやすいため、早期の雑草対策が必要です。
- ・アグロマックス水和剤は、発芽時の地割れが発生するまでの処理としてください。

表15 ごぼうの除草剤例

薬剤名	処理方法	使用時期	10a 当薬量	使用回数
アグロマックス 水和剤	全面土壌散布	は種後雑草発生前	200~300 ml	1回以内
		は種後雑草発生前(べたがけ)	100~200 ml	
ナブ乳剤	雑草茎葉散布 または全面散布	イネ科3~5葉期	150~200 ml	1回以内
		イネ科6~8葉期	200 ml	

### (2) 中耕、除草

ごぼうは酸素要求量が高いため、ほ場が硬く酸素が少ないと根の生育が悪くなります。ほ場が硬くなっている場合は、除草を兼ねて中耕してください。

### (3) 分肥

計画的な分肥を実施する場合は、は種後 60~70 日頃(本葉 3~4 葉期)に施肥してください。

## 周辺作物への飛散(ドリフト)防止の徹底と農作業安全

- ・作物の成長も進み、農薬散布の機会が増える時期です。農薬散布に際しては風向きに注意し、周辺作物への飛散防止に努めてください。
- ・農薬を使用するときは、必ずラベルの安全使用基準や注意事項を確認しましょう。
- ・農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。
- ・使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。
- ・農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。
- ・作業機連結時の挟まれ事故、機械昇降時の落下事故に十分注意しましょう。